

青春スクロール

母校群像記

開拓精神豊かな女性／芸術に点数なし

平塚江南高校(以下、江南)は、県内2番目の県立高等女学校として1921(大正10)年に開校。開拓精神あふれる女性を各界に送り出した。

1期生の沖津くら(故人、26年卒)は、帝国女子医学専門学校



沖津が80歳の時、「葬式用に」と自分で用意した遺影。実際は99歳の大往生だった

平塚江南高校 1



校(現東邦大学)に進み、開業医の養父を継いだ。戦後初の県議会議員選挙(47年)では県内初の女性県議となった。開校当初は畑に校舎が立つだけ。沖津たちは背丈ほどある草をむしり、桜の木を持ち寄って植え、校庭を作ったという。

万葉集研究で知られ、日本女子大学長を務めた青木生子(92、38年卒)は「生涯の師に出会った」と語る。戦後、貧困などで進学できない人のため、通信教育の先駆け「大学講座」を主宰した高瀬兼介。熱く理想を語る

国語教師に魅了され、放課後はクラス全員が校庭で高瀬を囲み、「友情とは」「人生とは」と議論した。

女性初の日本陶磁協会賞を受けた陶芸家辻協子(故人、48年卒)も、平塚高女で美術教師の影響を受けた。「芸術に点数はつけられない」と全員に「優秀」をつけた。その教師宅に通ううち夫となる陶芸家、辻清明と出会う。

50(昭和25)年の共学化後も活躍は続く。「皿と紙ひこうき」などの作

品がある童話作家石井睦美(56、75年卒)が忘れられないのが高1の現代国語。歌人でもあった担任は、授業の初めに短歌を書き取らせた。「寺山修司の歌などを黒板にさっと書き、その字がまた美しかった」。石井に言葉への感受性が芽生え、育ち、29歳で新美南吉児童文学賞などを射止める。

フジテレビアナウンサー室副部長の川野良子(43、89年卒)は、



クラブ活動や高校行事など充実した3年間を送った川野



目標とする先輩レスラー、アジャ・コングをヘッドロックで攻める松本(左)

名物先生による厳しい生徒指導が印象に残る。「スカートの長さやソックスなど特に制服についてよく注意されました」。合唱部と応援団マネージャーを兼務。山北町の「江嶺荘」での学年合宿は楽しかった。はんごう炊き、雑魚寝など、夏の思い出がよみがえる。

女子プロレスラー松本浩代(27、2004年卒)は柔道部

で体を鍛えた。「合宿の食事の量がハンパなく多く、つらかった」。専門学校の実習先でプロレスに出あい、20歳でデビュー。東海道線にちなんだオレンジ色の衣装に、必殺技は「東海道落とし」。大きな大会には今も柔道部の仲間が駆けつける。

石井睦美の近著は「都会のアリス」(岩崎書店)、「しろさざとりんごの木」(文溪堂)。松本浩代の試合は4日、12月8日正午から東京・後楽園ホールで。チケットの申し込みはメール(sunflowerbigpower@yahoo.co.jp)に。

江南の情報はkanagawa@asahi.comの「青春スクロール江南係」へ。